

北見日食の思出

関口鯉吉

マンマと首尾よくジャーナリズムの網の目を抜けて目的地に辿り着いた「北見行雄」は、偶然にも札幌から同行の栄を得た早乙女先生の一行と共に、村内有志の出迎えを受けて、プラットホームに降り立った瞬間、カメラの一斉射撃である。こうなったら最早ジタバタしても詮ないと、身柄を完全にお預けして悠然と観測地点の踏査にとりかかる。

物好きにも里から十軒^{キロ}も奥の原野に陣取る事に決めて準備をさせておいた自分は、自動車で印度^{インド}洋の荒浪を乗り切る思いの凸凹道を四十分して日進部落というのに着いた。一里も手前から出来かけの幾つかの小屋がけが点々とさしまねいて居る。曾^{かつ}て冬来たときは一望平坦な白野であったが、これは幻覚であった。緩漫ながら起伏する丘陵を下りては登る三里の細道は侵撃者にとってダンピングゴエフィシエント正に百プロセントであると先見に微笑した。それは後からの事実が十分に証明してくれた。科学者の極端な現世逃避と笑うなかれ。我等の残忍な悪戯^{いたずら}と嘲るなかれ。器械の性能と我等の微力な能作を最大限度に發揮せしむるに絶対必要なコンチションであるから致し方ない。百秒余の短時間に数月乃至数年の努力をコンデンスして邦家学界の寄托にそむかざらんと神経を極度に尖らす我等にとつて、又一刻千金と眼の色を変えて準備にあえぐ求真の若人にとって、世俗の煩いは無上の障碍である。時としては徹底的失敗の因でさえあり得る。

然^{しか}し幸か不幸か血と涙を有つて生れた自分には這の百プロセントをして百プロセントたらしむる忍耐力を有たな

かった。科学する者もやはり生活する人間であった。

こうした事情のうちに愈々その日が来た。前々日まで器械の調整に全力を費す暇を有たなかった自分は、際どくも前夜に至つて『先ずこれでよかつた』と安心の域に入った。五日までに据付を終り九日までに試験を了し、以後七日間の猛練習とプロブラムを胸に描いて居たは全く無駄であつた。一度の予行演習すら行つ余裕なしに最後のドタン場に直面してしまつた。

野球はシートノックやフリーバッティングで試合の度胸や呼吸が出来るものではない、ボートにしてもただのレースコースでは駄目だよなどと若かりし日の気焰交りにパテントの練習用人造日食を指して試合精神の呼吸につとめた自分の愚かさを嘲けらねばならなくなつた。記者等の間に答えて「乃公は五十の手習いだ」と平静を装つ心の中も実は苦しかった。然し他の六人の準備が少しの遺漏もなく進んで居たのを見て、是れでよいのだと微笑した。

其の日は朝来満天の雲であつた。オホツク海の東に去つた大きな低気圧の後をうけて不連続線にかかつて居る。朝八時北西方の空は青味に輝いて居た。然し黒と青の境界線は中々動かない。「クモリナレドミコミアリ」と直ちに打電して、刻々に空を見守つた。雲は次第に薄れ、頭上にも青空が折々は見え出した。「テンキヨクナリツツアリ」と打つたが、阿寒岳から昆々こんこんと湧き出る雲の集団は去来絶え間なく、希望と失望の交錯した気待が腸を煮立たした。十二時四〇分頃と思しく、北西方の空に飛行機が一台爆音高く舞い上つて遙か北方の地平線に消えて行つた。気象台の観測機が離陸したものらしい。空模様を気づかい一同の目は一斉に此の方面に向けられた。皆思わずやつて居るなど叫んだ。次いで二機三機が後から後からと南西の山端に向つて一文字に消えて行く、各新聞社の通信班が東京めがけて突進するのだ。

第一触は近づいた。雲の切れ目は益々大きくなって来る。雲から出で隠れる太陽の姿がいたましい。然し第一触は完全に雲隙から掴まれた。三時には実視観測を受けもつた天文台の石井君が「五秒程遅れた」と注進に來た。次で一番北方の小屋で本多三郎氏を手助けに赤道儀を引き請けて居た氣象台の吉成君が大きくシャッターを響かせて火蓋を切つた。「度毎に調子を見ながらやります」と暗室に消える。度胸はよいぞと安心した。平面格子に三米のレンズでフラツシを指摘した天文台の野附君、同じシイロスタットにて水晶分光儀を用いスリットスペクトルをねらつた藤田君の小屋を見舞つと、二人共二度目の日食で一段と落ちつきを見せながら、学生の風間君を手助けに器械の調子を見守つて居る。スリット無しでコロナの単光像を捕えようとする小岩井君、本多三郎君を手助けに水晶分光器でコロナの紫外輝線を掴もうとする川畑君（氣象台）等次ぎ次ぎに小屋を見廻つた。皆十分の平静を以て時の至るを待つてる様子を頼もしく思いながら自分の小屋へ歸るや否や、吉田君を介添に雲間からねらい打ちに分光器のシャッターを切つた。

二町彼方のガルバノメーターを据えた地下室の上で光電装置と回転フィルムとを一手に操る北岡君（氣象台）の忙しさに同情しながら第二第三と太陽が雲間を出る毎にねらい撃ちを続けて行つた。外は塵も動かぬ無風状態である。二重三重の警戒線の中で息づまるような静かさを破つて、パンパンとシャッターの音が次第に暗くなつて行く天地に響いて凄愴せいそうの氣を添える。十分前に器械の各部を仔細に点検して一と安心した所に、クロノグラフ監視と電気信号を擔当した塚本君（氣象台）の手から三百秒前の信号がけたたましく鳴り響いた。

取枠を嵌めかえて直視分光器を据え直したときは既に若干のフラウンホーファー線がスリット無しで認められる程に細くなつていた。雲足が早いので皆既前に次の雲塊にかかるのは明白と思われた。「畜生め」と私が叫んだそつだ。一分前の合図が來た。十秒前のが來た。此の時分既に雲縁がかぶつて來た。自分は「此の野郎」と叫んだそ

うだ。分光器の闇線は益鮮明になって来た、全身がゾクゾクして胸の高鳴りが感じられる。自分ながら少々上って居るなど思いながら、未だ未だ未だ未だとシャッターを握る吉田君を制しながら呼笛を口に食いしばった瞬間、見る見る闇線が輝線に反彩して行くのに気づいた。「成程此奴が閃光だな」など考える暇もない。成るべく短い輝線が出る迄思い切りひつぱって置いて、ピーツと腹底から吹き出した。此間数秒だ。闇の中からパタリと彼方此方でシャッターの音がした。

二十秒毎に鳴る筈の信号時計の音さえ聞えぬ程上って居たと気付いた自分は、平素の調子で秒数を頭中に数えた。露出四十秒、次に三十秒。十秒前の信号が鳴るや第三の露出を開始する。直後パツと光りがさした。来たなど思うが早いか閉めたが幾分遅れであったらしい。嗚呼ああ是あでおまいか。長恨永へに尽きずである。どうも第三触に近い十秒程以外は絶えず雲の中に隠見して居たらしい、残念であった。千米のレースコースをズドンとゴールに入った三十年前の一瞬間をふと頭に浮べた真剣味は同一である。

十分後、人事の総てを尽した各観測者は夫々の小屋の戸口を出て、去り行く雲を残念そうにいらんで居た。間もなく自分は警戒の任に当った里人の涙ぐましい誠実な援助と同情に感謝の辞を捧げる為に二町先の彼等が溜り場へと歩んだ。先輩同僚の心尽しに報いる為の報告電文を練りながら。

(昭和十一年六月二十九日、『大学新聞』)

- 関口鯉吉著『天文憧憬』(一九四八年四月、国立書院)所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。

• PDF化には \LaTeX 2 ϵ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。